

アイロニーの暗黙的提示理論とその優位性について

内海 彰

電気通信大学 電気通信学部 システム工学科

utsumi@se.uec.ac.jp

1 はじめに

近年、語用論や心理学の分野でアイロニーの研究がさかに行われている。たとえばこの3年間(2000~2002)を見ると、少なくともアイロニーに関する論文が雑誌“Metaphor and Symbol”に11件(1回のアイロニー特集号を含む)、“Journal of Pragmatics”に5件、“Discourse Processes”と“Journal of Psycholinguistic Research”に各2件掲載されている、といった具合である。しかしながら、このように多くの注目を集めているにもかかわらず、アイロニーとはどのような言語現象なのかという問いに対して包括的な答えを与えるアイロニー論は、依然として得られていない。

筆者は、包括的なアイロニー論を目指して、アイロニーの暗黙的提示理論(内海, 1997; Utsumi, 2000; 内海, 2001)を提案している。本発表では、最新の(特に内海(1997)やUtsumi(2000)で論じていない)アイロニー研究を概観・検討しながら、暗黙的提示理論が他のアイロニー論よりも優れていることを示す。さらに、暗黙的提示理論のアイロニーに関する心理学的知見との整合性について論じる。

2 暗黙的提示理論

暗黙的提示理論の要点は以下の3点である(内海, 1997; Utsumi, 2000)。以下ではこれらを順に詳述する。

1. アイロニーは、アイロニー環境(ironic environment)というある種の状況設定を必要とする。
2. アイロニーは、アイロニー環境を暗黙的提示(implicit display)する表現である。
3. アイロニーは、暗黙的提示の諸条件によって特徴づけられるプロトタイプ・カテゴリーである。

2.1 アイロニー環境

アイロニー環境はアイロニーの成立に必要な不可欠な状況設定であり、以下の3つの事象から構成される。発話状況がこれらの3事象を含むとき、その状況はアイロニー環境である。

話し手の期待 話し手があることを期待している。

期待と現実の不一致 話し手の期待が現実には満たされていない。

否定的態度 期待と現実の不一致に対して、話し手が否定的な態度(e.g., 非難)を持っている。

したがって、これらの事象のうちの一つでも欠けている状況での発話はアイロニーとなり得ない。たとえば、以下の2つの状況における発話(1)を考えてみると、状況1での発話は典型的なアイロニーであるのに対し、状況2での発話はアイロニーとはならない。

状況1 部屋を散らかしたままにしている息子に対して母親が、

状況2 部屋をいつもきれいにしている息子に対して母親が、

- (1) まあ、本当にきれいな部屋ね。

これは、話し手である母親は息子が部屋をきれいにすることを望んでいるが(話し手の期待)、それは現実には満たされておらず(期待と現実の不一致)、母親はそれに対して不満を抱いている(否定的態度)ことから状況1がアイロニー環境であるのに対し、状況2ではアイロニーを動機づける母親の期待や否定的態度が存在せずアイロニー環境ではないためであると説明できる。

アイロニー環境の3要素の中で特に重要なのが話し手の期待である。話し手が何かを期待していなければ、そもそも期待と現実の不一致や否定的態度は存在しない。しかし、今までに「アイロニーの話し手がある期待を必ず持っていなければいけない」と主張したアイロニー論は存在しない。話し手の期待を必要十分条件と考えることの利点については、本理論の優位性を論じる4章で詳述する。

なお、アイロニー環境は皮肉な状況を表す状況アイロニー (situational irony) とは異なる概念であることに注意されたい。たとえば、状況 1 は発話 (1) をアイロニーにするために必要な状況設定であるが、状況 1 自体に皮肉なところは全くない。しかし、残念ながら一部の論文 (e.g., Gibbs & Colston, 2001) における本理論への言及はアイロニー環境と状況アイロニーを混同しているように思える。

2.2 暗黙的提示

アイロニー環境である状況下での発話がアイロニーとなる / 解釈されるためには、発話がアイロニー環境を暗黙的に提示していなければいけない。言い換えると、アイロニーとは現在の発話状況がアイロニー環境であることを聞き手に暗黙的に提示する発話である。アイロニー環境の 3 事象は、言語表現を用いてそれぞれ以下のように暗黙的に提示される。

婉曲的言及 言語表現は、話し手の期待内容と接続 (coherence) 関係 (たとえば可能化や意志的な原因など) が成立する内容を含むことによって、期待に婉曲的言及 / ほのめかし (allude) する。ただし、話し手が何かを期待しているということを直接的に表現する場合は、婉曲的言及ではない。

語用論的不誠実性 言語表現は、語用論の原則 (たとえば、質や量の公準 (Grice, 1989), 言語行為の適切性条件 (Searle, 1979), 丁寧さの原理 (Brown & Levinson, 1987) など) に表面上違反することによって、語用論的不誠実性を含む。

否定的態度の暗示 言語表現は、さまざまな言語的・非言語的の手がかり (たとえば、形容詞や副詞による誇張表現、特定のイントネーション・音調・アクセントなどのいわゆるアイロニー標識 (Kreuz & Roberts, 1995)) を伴って、話し手の否定的態度を暗示する。

たとえば、状況 1 でのアイロニー発話 (1) は母親の期待に言及し、事実に反することを述べることによって質の公準に違反し、「本当に」という誇張を伴っているので、アイロニー環境を暗黙的に提示している。一方、状況 1 での発話であっても、以下の表現 (2) は字義的に解釈して適切であるとともに、話し手の期待を婉曲的言及していない (期待していることを直接表現している) ので、暗黙的提示が成立しない。

(2) きれいにしてくれると期待していたのに、相変わらず散らかった部屋ね。

2.3 アイロニーのプロトタイプ性

ある発話がアイロニー環境を暗黙的に提示しているかどうかの判断は、実はそれほど単純ではない。というのは、すべてのアイロニーが必ずしも暗黙的提示の 3 要素を満たしているわけではないからである。たとえば、発話 (1) から「まあ」「本当に」という強調語句を取り除き、非言語的な手がかりを一切与えないとしても、依然としてアイロニーと解釈できる。さらに言うと、発話の解釈以前に話し手である母親の期待を知らない、つまり婉曲的言及の判断ができない場合でも、アイロニー標識を伴っていれば発話 (1) をアイロニーと解釈できる (Barbe, 1995)。要するに、暗黙的提示の 3 要素をすべて満たしている (と判断できる) ことは、アイロニーの必要条件でもないし十分条件でもない。

これらの事実は、アイロニーという概念は境界が明確に定義できるものではなく、一種のプロトタイプ概念であることを示している。つまり、暗黙的提示の 3 要素を多く満たしているほど、その発話は典型的なアイロニーと判断される。このようなプロトタイプ性は、暗黙的提示の 2 要素以上の成立 / 不成立間で皮肉度評定に統計的な有意差が見られるが、3 要素すべての成立 / 不成立間では有意差がないという内海 (1999) の実験結果からも支持される。

2.4 アイロニーの解釈過程

アイロニー環境を暗黙的に提示する発話がアイロニーであるので、アイロニーの解釈とは発話が暗黙的提示を満たしていると認識することで、アイロニー環境の成立を知ることである。つまりアイロニーであるとの認識 = アイロニー解釈であり、解釈結果はアイロニー環境の 3 事象の (再) 認識となって現れる。

暗黙的提示理論のこのような考え方にに基づき、筆者は図 1 に示すアイロニーの解釈過程の認知モデルを提案している (内海, 2000)。このモデルの特徴は、話し手の期待が既知の場合と未知の場合で解釈過程が異なる点である (図 1 には示されていないが、話し手の期待を事前に知らない場合には、Step 1 の暗黙的提示成立

の判断において、婉曲的言及の代わりに発話内容の評価値を用いている。)この認知モデルはアイロニーに関する多くの経験的知見と整合するように構築されており、さらに、この認知モデルを関連性に基づく言語解釈の計算モデルと統合することによって、アイロニー解釈の計算機シミュレーションも行っている。これらの詳細については文献(内海, 2000)を参照されたい。

3 既存のアイロニー論とその問題点

今までに提案されてきたアイロニー論は、違反・不適切性に基づくアプローチ、エコーに基づくアプローチ、ふりに基づくアプローチ、意味反転・否定に基づくアプローチの4つに大別できる。ただしこれらの分類は必ずしも排他的ではなく、複数のアプローチを統合したアイロニー論も少なくない。以下ではそれぞれのアプローチについて詳述するとともに、その問題点・欠点を指摘していく。

3.1 違反・不適切性に基づくアプローチ

このアプローチでは、何らかの原則や満たすべき条件の違反、またはそれによって生じる不適切さがアイロニーの本質であるとする。このアプローチに属するアイロニー論には以下のものがある。

- 伝統的な語用論による説明：質の公準違反(Grice, 1989)、言語行為の適切性条件違反(Searle, 1979)、Griceのアイロニー論の明確化(安井, 1978)
- 発話内行為に対する不誠実さの意図的な表現(Haverkate, 1990)
- 状況と発話内容の不整合性(深谷 & 田中, 1996)
「皮肉は、状況と発話内容の辻褃が合うように《態度把握》の調整を行った結果として現出する(*ibid.*, p.249)」
- 意図された不適切(intended infelicitous)言語行為(辻, 1997)
「アイロニーとは、意図的にその不適切性が示され、最終的に発話人称 X が発話主体 I と一致していない <I am not X> ことが示されるような言語行為である」
- 関連のある不適切性(relevant inappropriateness)(Attardo, 2000)

これらのアイロニー論の問題点として、これらの概念・条件を満たさないアイロニーの存在(十分条件でない)、これらの概念・条件を満たす非アイロニーの存在(必要条件でない)を指摘することができる。例えば状況1での以下の発話(3)は、母親がまさにそのように思っている、つまり質の公準や発話内行為の適切性条件を違反していないのに、アイロニーとなる。

(3) 部屋をきれいにする子は、お母さん大好き。(I love children who keep their rooms clean.)

より包括的な概念である不整合性(深谷 & 田中, 1996)や不適切性(辻, 1997; Attardo, 2000)を用いて発話(3)を説明することは可能であるが、前述したように、不適切性を認識できない発話でもアイロニーと解釈される場合があることは指摘しておきたい。たとえばその日はじめて同僚に会ったときに同僚が「今日は最高の日だよ」と言った場合、同僚が実際に今日が最高の日だと思っているかどうかを知らなくても、場合によってはアイロニーと解釈することができる(Barbe, 1995)。

さらに、同じような不適切さが存在していてもアイロニーと解釈されない場合がある。たとえば、

- (4) (どしゃ降りの中で)これは素晴らしい天気だ。
- (5) (雲一つない晴天で)これはひどい天気だ。

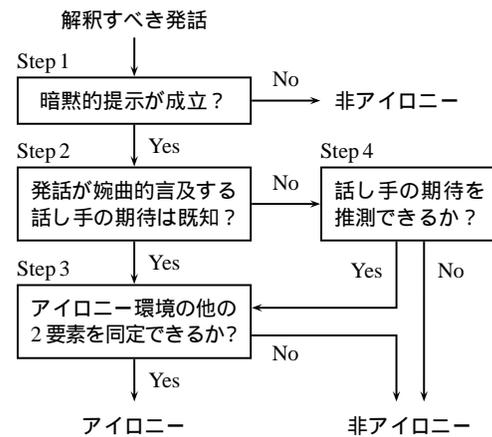


図1: アイロニー解釈の認知・計算モデル

のいずれの発話も不適切であるが、(4)は典型的なアイロニーと解釈されるのに対し、(5)はアイロニーとは解釈されない。不適切性という概念だけではこの非対称性を説明できないのである。

辻(1997)のアイロニー論では、話し手の関与・意図の有無によって、アイロニーと単なる不適切な発話との区別を行っている。しかし意図的かどうかの判断基準は非常に曖昧である。つまり、発話(4)には話し手の意図が関与しているが、発話(5)には関与していないという違いを説明することが困難である。さらに、発話(5)はある状況設定のもとでは明確にアイロニーと解釈されること(3.2節を参照)を、意図の有無だけでは説明できない。

Attardo(2000)のアイロニー論では、不適切性と話し手の意図の他に、文脈との関連性という概念を考えている。しかし、依然として発話(5)がアイロニーと解釈されないことを説明できない(天気の話題という点では関連性も満たしている)。さらに彼が不適切性と関連性の違いを説明するために用いた以下の発話例は、そのまま彼のアイロニー論の反例になっている。

- (6) a. Father: "Did you eat the chocolate?"
b. Daughter: "No." (her mouth is covered with chocolate) (ibid., p.819)

3.2 エコーに基づくアプローチ

このアプローチでは、アイロニーはある表象(期待, 信念, 発話または社会的通念)の間接的なメタ表象(metarepresentation)であると考えられる。たとえば、パソコン通信の電子会議室でのやりとりにおける以下の反唱型(provoked)アイロニー(7b)は、エコーを伴ったアイロニーの典型例である。

- (7) a. ABC12345 山田花子 村上春樹について
私は村上春樹は一流の作家だと思うのですが、みなさんはどう思いますか?
b. XYZ98765 川本太郎 RE:村上春樹について
村上春樹ですか?まさに超一流の作家でしょう!(爆笑) (辻, 1997)

エコーに基づくアプローチに属する理論としては、以下のものが提唱されている。

- エコー的解釈理論(echoic interpretation theory)(Wilson & Sperber, 1992; Sperber & Wilson, 1995)
アイロニーとは、誰かの考え、発話、期待や社会的通念に解釈的に類似した表象をエコーすることによって、それらに対する話し手の否定的な態度を表明する表現である。
- エコー的想起理論(echoic reminder theory)(Kreuz & Glucksberg, 1989)
アイロニーとは、ある出来事、ある人の発話や期待などをほのめかす(allude)ことによって、それらを聞き手に思い出させる表現である。
- ほのめかし理論(allusional pretense theory)(Kumon-Nakamura, Glucksberg, & Brown, 1995)
アイロニーは、成立しなかった(failed)期待や通念をほのめかしつつ、言語行為の適切性条件を違反しているという語用論的な不誠実さ(pragmatic insincerity)を含む表現である。

エコーに基づくアプローチの優れている点は、違反・不適切性に基づくアプローチでは説明できない非アイロニー発話(5)や(6b)を適切に説明できる点にある。つまりこれらの発話は何かをエコーした表現ではないのである。逆に、適切なエコーの対象を想定できれば、これらの発話もアイロニーと解釈され得る。(たとえば、大雨を予想した天気予報士への非難として(5)を発話した場合が考えられる。)

しかしながら、違反・不適切性に基づくアプローチと同様の問題点を指摘することができる。まず、解釈的エコーを伴わないアイロニーが存在する。たとえば、(3)のアイロニーが何をエコーしている/ほのめかしているかは自明ではない。このような批判への回答として、Sperber & Wilson(1998)では「当該発話はその状況において適切(relevant)である」という高次命題をエコーするものだと反論しているが、この説明は混乱を増すだけである(Utsumi, 2000)。なぜならば、この説明が正しいとすると、今まで説明がついていた他のアイロニー(例えば、発話(1))でも同様の説明が可能であり、今までの説明の必要がなくなるからである。さらに、否定的な態度を伴った解釈的エコーを含む非アイロニーも存在することが指摘されている(Giora, 1995)。以下の発話(8b)はその例である。

- (8) a. さっき山田さんはBBSで何て言った?
b. 村上春樹が超一流の作家だって(爆笑)

Kumon-Nakamura et al. (1995) のほのめかし理論は不適切性に基づくアプローチとエコーに基づくアプローチを統合した理論であり、今まで述べてきた問題点のうちの多くを解決することができるため、現在では有力なアイロニー論と考えられている(岡本, 2001: p.133)。しかし依然として、不適切性を認識できない発話がアイロニーと解釈され得ることや、何をほのめかしているかが明らかでないアイロニーの存在を説明することができないなどの問題点が残っている。

3.3 ふりに基づくアプローチ

このアプローチでは、アイロニーの話し手・聞き手や発話状況などに多層性(現実と仮想)を指定して、アイロニーとは仮想世界での誠実な発話のふりをする(または仮想世界へ視点を移す)表現と考える。

- ふり (pretense) / 共同ふり (joint pretense) 理論 (Clark & Gerrig, 1984; Clark, 1996)
アイロニーとは、発話が誠実であると信じている仮想の人間が発話を真に受ける仮想の人間に向かって話しているふりをすることによって聞き手に自分の心的態度を伝える表現である。
- 仮人称発話理論 (橋元, 1989)
「アイロニーの正体とは、結局、字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し、結果的に『言及』とみなしうる陳述行為を行なうという一種の『仮人称発話』なのだ (ibid., p.87)」

これらのアイロニー論の問題点として、他人の発話のふりをするのと他人の発話をエコーするのと本質的に同じであり (Williams, 1984)、わざわざ「ふり」という概念で説明する必要性が見い出せないという点である(橋元(1989)は結果としてエコーとなることを認めている。)さらに、パロディとの区別ができない、仮想世界におけるふりを想定するのが困難な/不適切なアイロニーが存在するなどの問題点も挙げることができる。なお、話し手の多層性(発話主体と発話人称)という点では、辻(1997)の理論はふりに基づくアプローチと不適切性に基づくアプローチを統合したものと考えることができる。

3.4 意味反転・否定に基づくアプローチ

このアプローチでは、アイロニーは字義的な意味の反対・否定の意味を伝達する表現と考える。伝統的な語用論に基づくアイロニー論 (Grice, 1989; Searle, 1979; 安井, 1978) をはじめ、古典的なアイロニー論 (e.g., Roy, 1977) に共通する考え方であるが、このような素朴な意味反転論の問題点は多くのアイロニー研究で指摘されてきた。反対の意味が伝達されるとは考えられない多くのアイロニー(例えば発話(3))が存在するのである。

最近では、この問題点を修正すべく、素朴な意味反転論を改良した以下の理論が提案されている。

- 間接的否定 (indirect negation) 理論 (Giora, 1995)
アイロニーとは、明確な否定標識を用いない否定表現であり、否定された字義的な意味と否定により得られる推意が同時に処理されることによって、それらの違いを明確にする表現である。
- エコーと意味反転の統合 (瀬戸, 1997)
「アイロニーとは、エコーおよび/または意味反転の手段によって暗示的な批判を狙う方法である。(ibid., p.146)」

Giora (1995) は、間接的否定という概念によって字義どおりの反対の意味という限定された概念をアイロニーに適合するように拡張したと考えることができる。しかし、すべてのアイロニーが文字通りの意味を否定した意味を伝達するとは考えられないという問題点は依然として残る。さらに Curc6 (2000) が指摘するように、メタ表象や多層性を考えないアイロニー論では (7b) などのアイロニーの説明には無力である。

瀬戸 (1997) は、解釈的エコーを含まないアイロニーは意味反転が生じると主張する。しかし、前述した意味反転論の問題点は解消されていない上に、エコー的解釈理論の欠点もそのままである。たとえば、(3) のアイロニーは解釈的エコーを伴っていないし、反対の意味を表現しているとも考えられない。さらに、エコーを伴わない意味反転によるアイロニーの例として以下の発話 (9b) を挙げているが、本当に反対の意味を伝達しているのだろうか。また、メタ表象という概念を用いて説明できないのであろうか。

- (9) a. A: Bob has just borrowed your car.
b. B: Well, I like that! (ibid., pp.128-129)

4 暗黙的提示理論の優位性

本章では、暗黙的提示理論が従来のアイロニー論の問題点をどのように解決するかを述べるとともに、実験的研究を通じて得られた経験的知見との整合性について論じることによって、アイロニー論としての暗黙的提示理論の優位性を示す。

4.1 アイロニーはプロトタイプ・カテゴリーである

プロトタイプの視点によって、前述した問題点のいくつか、特に違反・不適切性に基づくアプローチの問題点を解決することができる。つまり不適切性を認識できない発話がアイロニーと解釈されるのは、暗黙的提示の他の2要素が認識されるからであり、不適切性を含む非アイロニーでは話し手の期待やそれへの婉曲的言及が認識できないからである。

暗黙的提示理論は、上述のアプローチのうち不適切性に基づくアプローチとエコーに基づくアプローチを修正・統合した理論とみなすことができる。その意味では、Kumon-Nakamura et al. (1995) のほのめかし理論を拡張した理論と言える(岡本, 2001: p.134)。しかしほのめかし理論と異なる点は、このプロトタイプの視点である。これと婉曲的言及(4.2節を参照)によってほのめかし理論の問題点を解決することができる。ほのめかし理論よりも暗黙的提示理論のほうが妥当であることは、前述した内海(1999)の他にColston(2000)の行った実験結果からも示唆される。この実験では、ほのめかしがアイロニー理解の必要条件であるが、語用論的不誠実性は必ずしも必要条件ではないという結果が得られている。

プロトタイプの視点は、アイロニー標識に関する経験的知見とも整合性がある。心理言語学の研究においてさまざまなアイロニー標識 e.g., 誇張表現(Kreuz & Roberts, 1995), プロソディ・韻律(Rockwell, 2000; Bryant & Tree, 2002), 敬語(Okamoto, 2002) がアイロニー解釈を促進することが示されている一方、アイロニー標識がなくてもアイロニーを解釈することも可能である(Gibbs & O'Brien, 1991)。これは、暗黙的提示の要素の一つであるアイロニー標識が存在したほうがアイロニー度は高くなるが、この要因がなくても他の2要素を認識することによりアイロニー解釈が可能である、と説明できる。

4.2 婉曲的言及は解釈的エコーよりもアイロニーのメタ表象性を適切に表す概念である

エコーに基づくアプローチの問題点が生じる原因として、(a) アイロニーがエコーする対象が広すぎる(誰かの意見や期待から個人に帰すことのできない社会的通念まで)、(b) エコー対象と発話内容の関係の捉え方が不十分である(エコー的解釈は含意の共有に基づく関係である)、という2点を指摘してきた(Utsumi, 2000)。これに対し暗黙的提示理論では、(a) 婉曲的言及の対象は話し手の期待だけであり、(b) 言及対象と発話内容(の一部)とが接続関係の連鎖によって関係づけられると考えることにより、エコー的解釈の問題点を解決している(同様にCurcó(2000)も発話の推意もエコー対象とするように拡張すべきだと指摘している)。たとえば発話(3)では、その内容の一部が「息子が部屋をきれいにする」という母親の期待を表現・表象しているので、期待への婉曲的言及が成立する。

また、暗黙的提示理論では、(7b)のような反唱型アイロニーは直前の発話をエコーしているのではなく、「その発話・意見が間違っている/不適切であることをその人が知る」という話し手の期待(この例では、村上春樹が一流の作家だという意見が間違っていることを発話者が認識するという期待)に婉曲的言及していると考え(このような期待は、通常、直前の発話を解釈することによって生じる期待である)。こう考えることによって、発話(8b)がアイロニーと認識されないのは、(8b)からアイロニーを動機づける話し手の期待を想定するのが困難だからである、と説明することができる。

4.3 話し手の期待はアイロニーに不可欠である

アイロニーに話し手の期待(つまりアイロニー環境)が不可欠であると考えることによって、前節で述べたメタ表象性の適切な説明の他に、暗黙的提示理論を優位にするいくつかの利点を挙げることができる。

その一つが、話し手の意図・関与とアイロニー表現の関係が明確になるという点である。つまり、アイロニーには必ず話し手の期待が必要であるので、話し手がその発話に意図的に関与しているのは明白である。逆に、適切な話し手の期待を推測できれば、その発話は話し手が関与していると想定することは妥当だと考えられる。

さらに、最近のホットトピックである心の理論とアイロニー解釈の関係を適切に扱うことも可能である。心の理論とは他人の心の状態を認識/推測する能力のことであり、人間に特有の能力と考えられている。しかし自閉症者や右半球の脳障害者では、このような他人の心を読む能力が健常者に比べて劣っている (Baron-Cohen, 1995)。Happé (1993) は自閉症者が比喩は正しく理解できるがアイロニーの理解は困難であることを示し、McDonald (2000) は右半球の脳障害者が健常者に比べてアイロニー（実際には sarcasm）解釈の能力が劣ることを示している（ただしアイロニーが不誠実さを含むということは認識できる）。これらの知見はアイロニー解釈に他人の心を読む能力が不可欠であることを示しており、すなわちそれは話し手の期待を推測するということである。つまりアイロニー解釈にとって話し手の期待は不可欠なのである。なお、エコーに基づく他のアイロニー論では単なる表象の表象（発話や社会的通念へのエコー）を伴うアイロニーも許しているため、心の理論の欠如によるアイロニー解釈の困難さを説明するには理論的に弱いといえる。

4.4 アイロニーは意味を伝達しない、状況を提示するだけである

従来の多くのアイロニー論、特に意味反転・否定に基づくアプローチでは、アイロニーは何らかの意味を伝達する、つまり話し手はアイロニーによって何かを語る (tell) と考える。しかしこの見方の問題点は 3.4 節で述べた通りである。

暗黙的提示理論では、アイロニー環境を暗黙的に「提示」するという言い方を用いている。この「提示」という言葉は、語る (tell) のではなく、話し手はアイロニーを用いてアイロニー環境を単に示す (show) 表現であるとの主張を明示している。これによって、反転・否定された意味などというものを考える必要がなくなる。アイロニーは「示す」言語行為だとするこの考え方は辻 (1997) のアイロニー論でも主張されており、これに関する彼の議論には筆者も同意する。

なお、瀬戸 (1997) のエコーを伴わないアイロニーの例 (9b) についても、暗黙的提示理論では話し手の期待に婉曲的に言及したアイロニーであると考えられる。つまり、「物を借りるには所有者に許可を求めてほしい」という話し手 B の期待を想定することが可能であり、その期待と現実の不一致を引き起こした「許可無しに車を借りる」という行為を 'that' によって発話内に含むことによって話し手の期待に婉曲的に言及している。よって意味反転を持ち出す必要性はなくなる。

5 おわりに

本発表では、さまざまなアイロニー論を批判的に検討することによって、暗黙的提示理論の有効性・妥当性を論じてきた。これらの議論によって、以下のようなアイロニーの特徴が明らかになり、暗黙的提示理論はこれらのいずれの特徴にも妥当な説明を与えられることが示された。

- メタ表象、または多層性：話し手の期待内容を含む発話によって、間接的に表象（婉曲的言及）する。
- 不適切性：文字通りの意味やその推意の伝達を考えると、何らかの不適切さがある。
- 話し手の意図：話し手の期待へ婉曲的言及することによって、話し手の意図の存在が明確になる。
- 状況の提示：アイロニーはアイロニー環境（の 3 事象）の成立を聞き手に提示する。
- アイロニー標識：プロトタイプの視点により、アイロニー標識に関する知見を矛盾なく説明できる。

しかしながら、暗黙的提示理論がアイロニーに関して得られた経験的知見のすべてを整合的に説明するまでには至っていない。たとえば、アイロニー環境の 3 事象の程度がアイロニー度の評定に影響を及ぼす可能性がある (e.g., Gerrig & Goldvarg, 2000)。暗黙的提示理論のさらなる精緻化が必要であろう。

謝辞 本研究の一部は（財）日産科学振興財団から助成（第 28 回日産学術研究助成金）を受けた。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

Attardo, S. (2000). Irony as relevant inappropriateness. *Journal of Pragmatics*, 32(6), 793–826.

- Barbe, K. (1995). *Irony in Context*. John Benjamins Publishing Company.
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. MIT Press.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Bryant, G. & Tree, J. (2002). Recognizing verbal irony in spontaneous speech. *Metaphor and Symbol*, 17(2), 99–117.
- Clark, H. (1996). *Using Language*. Cambridge University Press.
- Clark, H. & Gerrig, R. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113(1), 121–126.
- Colston, H. (2000). On necessary conditions for verbal irony comprehension. *Pragmatics & Cognition*, 8(2), 277–324.
- Curc6, C. (2000). Irony: Negation, echo and metarepresentation. *Lingua*, 110(4), 257–280.
- 深谷 昌弘, 田中 茂範 (編) (1996). コトバの意味づけ論—日常言語の生の営み—. 紀伊國屋書店.
- Gerrig, R. & Goldvarg, Y. (2000). Additive effects in the perception of sarcasm: Situational disparity and echoic mention. *Metaphor and Symbol*, 15(4), 197–208.
- Gibbs, R. & Colston, H. (2001). The risks and rewards of ironic communication. In Anolli, L., Ciceri, R., & Riva, G. (Eds.), *Say Not to Say: New Perspectives on Miscommunication*, pp. 187–200. IOS Press.
- Gibbs, R. & O'Brien, J. (1991). Psychological aspects of irony understanding. *Journal of Pragmatics*, 16, 523–530.
- Giora, R. (1995). On irony and negation. *Discourse Processes*, 19(2), 239–264.
- Grice, H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.
- Happ6, F. (1993). Communicative competence and theory of mind in autism: A test of relevance theory. *Cognition*, 48, 101–119.
- 橋元 良明 (1989). 背理のコミュニケーション：アイロニー，メタファー，インプリケーチャー. 勁草書房.
- Haverkate, H. (1990). A speech act analysis of irony. *Journal of Pragmatics*, 14, 77–109.
- Kreuz, R. & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 118(4), 374–386.
- Kreuz, R. & Roberts, R. (1995). Two cues for verbal irony: Hyperbole and the ironic tone of voice. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(1), 21–31.
- Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 124(1), 3–21.
- McDonald, S. (2000). Neuropsychological studies of sarcasm. *Metaphor and Symbol*, 15(1&2), 85–98.
- 岡本 真一郎 (2001). ことばの社会心理学 第2版. ナカニシヤ出版.
- Okamoto, S. (2002). Politeness and the perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17(2), 119–139.
- Rockwell, P. (2000). Lower, slower, louder: Vocal clues of sarcasm. *Journal of Psycholinguistic Research*, 29(5), 483–495.
- Roy, A. (1977). Toward a definition of irony. In Fasold, R. & Shuy, R. (Eds.), *Studies in Language Variation*, pp. 171–183. Georgetown University Press.
- Searle, J. (1979). *Expression and Meaning*. Cambridge University Press.
- 瀬戸 賢一 (1997). 認識のレトリック. 海鳴社.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*. Oxford, Basil Blackwell.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1998). Irony and relevance: A reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi. In Carston, R. & Uchida, S. (Eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, pp. 283–293. John Benjamins Publishing Company.
- 辻 大介 (1997). アイロニーのコミュニケーション論. 東京大学社会情報研究所紀要, 55, 91–127.
- 内海 彰 (1997). アイロニーとは何か? — アイロニーの暗黙的提示理論. 認知科学, 4(4), 99–112.
- 内海 彰 (1999). アイロニーはどのように識別されるか 暗黙的提示に基づくアイロニーの識別モデル. 人工知能学会誌, 14(4), 700–708.
- Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics*, 32(12), 1777–1806.
- 内海 彰 (2000). アイロニー解釈の認知・計算モデル. 情報処理学会論文誌, 41(9), 2498–2509.
- 内海 彰 (2001). レトリックの認知・計算モデル：隠喩とアイロニー. 認知科学, 8(4), 352–359.
- Williams, J. (1984). Does mention (or pretense) exhaust the concept of irony?. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113(1), 127–129.
- Wilson, D. & Sperber, D. (1992). On verbal irony. *Lingua*, 87, 53–76.
- 安井 稔 (1978). 言外の意味. 研究社出版.